

セルフヘルプグループメンバーが授業へ参加することの学習効果 ～セルフヘルプグループメンバーと学生の有用性の一致と不一致～

徳永 龍子, 前田 則子, 久松 美佐子

要 旨

目的：本研究は、アディクション等の障害を持ちながら地域で生活されているセルフヘルプグループのメンバーが、看護学科の健康教育論の授業へ参加し、自らの体験を語ることによる学生の学習効果と授業への知見を得るものである。

方法：研究に同意の得られたアディクション等のセルフヘルプグループメンバーと学生を対象にアンケート調査をした。セルフヘルプグループメンバーの伝えたいことと学生の理解内容の比較および学生の授業前後の関心度と印象度を比較検討した。

結果：受講後の学生は、セルフヘルプグループへの関心度やセルフヘルプグループメンバーの印象度が有意に高まった。また、セルフヘルプグループメンバーが学生に伝えたいことと学生が学んだことは、一致する項目と一致しない項目がみられた。一致する項目は、「人との関係やつながりの大切さ」や「自分たちの思いを知ってほしい」ということであった。一致しない項目として、「本音を語れる良い機会だった」、「社会復帰について」、「当事者が看護者や社会に期待すること」、「治療の大変さ」などであった。学生の学びの構造を因子分析した結果、『現状を知ること』と『その人の内面を知ること』の2つの因子が生成された。

考察：当事者の話を直接体験として聞くことは、学生の関心度を高めたり先入観をなくす良い機会になっていた。しかし、セルフヘルプグループメンバーと学生の有用性の間に一致と不一致が混在していた。不一致部分については、今後の参加授業にグループワークやディスカッションを取り入れ、学生がその人自身の内面的な心情にも触れて、『その人の内面を理解すること』へ結びつけることが、さらなる学習効果を得ることになると考える。

キーワード：セルフヘルプグループ、看護学生、授業参加、学習効果、有用性

I. 緒 言

平成18年、障害者自立支援法の施行に伴い、障がい者が地域で自立した生活ができる支援がより重視されている¹⁾。しかし、障がい者にとって地域で自立した生活を送るには、経済面の困難だけでなく、障害を持ちながら折り合いをつけて生活する困難、治療継続の困難、対人関係での困難など、多くの問題が浮き彫りになっている²⁾。

健康教育論では、個人、家族、組織、地域の関連を視野にいれ、地域で生活する人々の健康と生活の質の向上のための健康教育の方法を講義や演習を通して学習することを授業目的の一つとしている。そのため、これから看護者となる学生が、多くの困難や問題を抱えながら地域で生活しているアディクション等のセルフヘルプグループメンバー（以下、セルフヘルプグループメンバーとする）の語りを直接体験として聞くことは、援助者として対象理解をし、

真に求められている援助内容とは何かを考える良い機会となる。

本学科では、2004年からセルフヘルプグループメンバーを毎年講義に招き、障害を持ちながら地域で生活する者として、「看護学生に伝えたいこと」の体験発表の機会を作っている。例年5～10名程度のセルフヘルプグループメンバーの参加がある。本研究は、授業評価と授業への示唆を得ることを目的として取り組んだ。

II. 研究目的

セルフヘルプグループのメンバーが、看護学科学生へ伝えたいことと、受講する学生の受け止めの分析から、学習効果と授業への知見を得る。

III. 研究方法

1. 対象者

授業に参加するセルフヘルプグループメンバー11名とサポーター、家族等計14名、看護学科の2年生

50名のうち、研究に承諾が得られた者とする。

2. 調査期間

平成22年11月15日～12月31日

3. データの収集方法

- 1) 研究に同意の得られた看護学生に対し、平成22年度のセルフヘルプグループメンバーが参加する講義前と講義後に、関心度や印象の変化、語りを聞くことの意味、理解などを問う質問紙調査を行った。
- 2) 研究に同意の得られたセルフヘルプグループメンバーに対し、平成22年度の講義に参加し何を伝えたいかや、参加することの意味などについて問う質問紙調査を行った。

4. 分析方法

学生の授業前と授業後に受けたセルフヘルプの方に対する印象度および講話に対する関心度についてt検定で比較した。また、セルフヘルプグループの方の話より学生が理解したことについて内部構造を明らかにするために因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行った。セルフヘルプグループメンバーが伝えたかったことおよび学生が学んだことについては、100分率で集計した。

5. 倫理的配慮

対象者には、事前に、研究の目的、参加及び不参加の権利、プライバシーの保護等について、文書と口頭で説明し対象者の質問に十分に答えた。対象者が研究に参加するか否かは、本人の自由意思によって決定し、アンケートの返書を持って同意が得られたものとした。対象者のデータ収集にあたっては、個人への不利益及び危険性を配慮し、プライバシーや匿名性の保護に努め、対象者の安全を最優先とし、不利益・リスクがないよう配慮した。収集したデータは、厳重に管理し、研究終了後には全てのデータを消去した。

本研究は、平成22年11月に鹿児島純心女子大学看護栄養学部倫理審査の承認を得て実施した。

IV. 結 果

1. 対象者の概要

- 1) 本学看護学科3年生において、授業前質問紙に回答した学生は47名（回収率94%）、授業後質問紙に回答した学生は48名（回収率96%）であった。このうち、授業前、授業後共に回答のあった47名を分析対象とした。今までにセルフヘルプグループメンバーに会ったことのある学生は1名のみであった。
- 2) アディクション等のセルフヘルプグループメンバー及びサポーターの対象者14名のうち、研究参加に同意の意思が示され、返書があった者は7名（50%）

であった。セルフヘルプグループメンバーの内訳は、アディクション等が3名、サポーター2名、アディクション当事者でありかつサポーターでもある1名、事務局1名であった。年齢構成は、20歳代2名、40歳代2名、50歳代2名、60歳代1名であった。この授業への参加意思は、「自分で決めて来た」が3名（42%）、「頼まれて来た」が2名（29%）、「活動の一環で来た」が2名（29%）であった。

2. 学生のセルフヘルプグループメンバーに対する印象度と関心度の変化

学生の授業前と授業後に受けたセルフヘルプメンバーに対する印象では、85%の学生が、「会う前より好印象を受けた」と回答し、セルフヘルプメンバーの講話を聞くことへの印象度が有意に高くなった。（ $p=.001$ ）また、授業前のセルフヘルプメンバーの講話を聞くことへの関心度として、7点以下を示す学生が23%であったが、授業後は、すべての学生が7点以上の点数を示し、授業前の関心度と授業後の関心度が有意に上がった。（ $p=.001$ ）

3. セルフヘルプグループメンバーが伝えたかったことと、学生が学んだこと（図1）

セルフヘルプグループのメンバーが授業に参加することで、学生にどのようなことを伝えたかったかという質問では、回答の多い順として、「人との関係やつながりの大切さについて伝えたかった」（57%）、「自分たちの思いを知ってほしいと思った」（57%）、「生きづらさを理解してほしいと思った」（43%）、「依存症は誰でもなる可能性があることを伝えたかった」（43%）、「セルフヘルプグループの役割を伝えたかった」（43%）、「生きづらさの大変さについて伝えたかった」（29%）、「治療の大変さを知ってほしかった」（29%）、「本音を語るいい機会だと思った」（29%）、「生活の大変さについて伝えたかった」（14%）、「よい看護師になってほしいという思いを伝えたかった」（14%）、「自分たちに対する偏見をなくしてほしいことを伝えたかった」（14%）、「依存症の予防法を伝えたかった」（14%）であった。その他、自由記述として、「依存症の予防法として、子育ての大切さ、相手を尊重することの大切さを伝えたかった」、「あなたの身近にも当事者は居るということを伝えたいと思った」、「依存症について知ってくださることで身近にそういう人がいた時の助けになってほしいと思います」などの意見があった。

一方、セルフヘルプグループメンバーの講話から学生が学んだこととしては、「人との関係や繋がり大切さ」（87.5%）、「当事者の本音を聞くいい機会だった」（85.4%）、「生きづらさの大変さ」（83.3%）、「依存症は誰でもなる可能性があるということ」（83.3%）

「治療の大変さ」(66.7%),「セルフヘルプグループの役割」(66.7%),「セルフヘルプグループの方々の思い」(62.5%),「生活の大変さ」(60.4%),「生きづらさを理解した」(60.4%),「社会復帰のこと」(54.2%),「自分の特性とのつきあい方」(47.9%),「就労や経済面の大変さ」(37.5%),「体調を維持することの大変さ」(35.4%),「セルフヘルプグループの方々に対する偏見の現状」(22.9%),「依存症の予防法」(14.6%),「当事者が看護師や社会に期待すること」(10.4%),「よい看護師になってほしいという当事者の思い」(8.3%)であった。

また、学生が学んだことを因子分析した結果、大きく2つの因子に分けられた(表1)。分析結果を分類としてカテゴリー名を思慮した結果、第1因子『その人の内面を知ること』と第2因子『現状を知ること』の2つが生成された($\alpha = .734$)。『その人の内面を知ること』とは、偏見や生きづらさ、つながりの大切さなど、メンバー自身の内面的な思いを知ることであった。また、『現状を知ること』とは、生活や治療、就労や経済面などの大変さというメンバーが抱えている現実的問題を知ることであった。

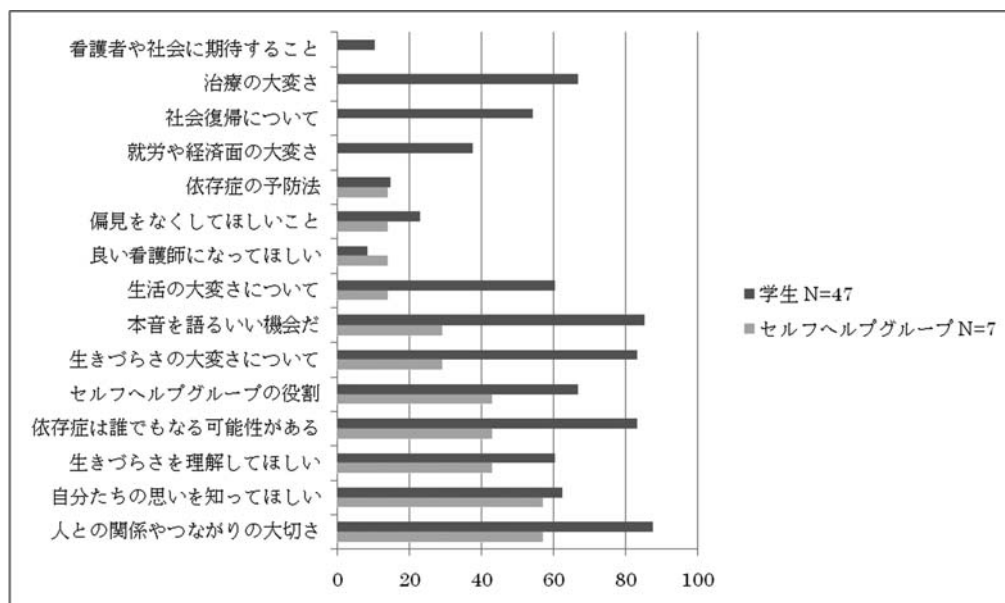


図1. セルフヘルプグループメンバーが学生に伝えたかったことと学生が学んだことの比較

表1. セルフヘルプグループの話を聞いた学生の学びの構造

項目内容	第1因子 内面を知ること	第2因子 現状を知ること	共通性
生活の大変さ		0.782	0.612
治療の大変さ		0.527	0.279
就労や経済面の大変さ		0.523	0.388
体調を維持することの大変さ		0.491	0.430
社会復帰のこと		0.323	0.107
セルフヘルプグループの方々に対する偏見の現状	0.699		0.519
セルフヘルプグループの役割	0.605		0.374
当事者の方が看護師や社会に期待すること	0.536		0.359
当事者が社会に貢献していること	0.428		0.239
依存症は誰でもなる可能性があること	0.394		0.162
依存症の予防法	0.366		0.179
当事者の本音を聞くいい機会	0.356		0.127
セルフヘルプグループの方々の思い	0.307		0.114
生きづらさの大変さ	0.258		0.084
人との関係やつながりの大切さ	0.200		0.043
因子寄与	2.250	1.766	
寄与率(%)	14.988	11.772	

V. 考 察

1. 学生のセルフヘルプグループメンバーに対する印象度と関心度の変化について

セルフヘルプグループメンバーの体験発表の授業を始めて、今年度で7年となる。例年、依頼する人数よりも大勢の方の参加がある。今年度も、5名の参加依頼に対し、総勢14名の来校であった。

知ることとは、目の前の対象の状態を確認することといえる。また、理解するとは、目の前の対象の状態と自分が持つ知識を整理しながら新しい知識を得て一致させ、自己を納得させ納得の範囲を広げることといえる。学生は、普段会う機会のないセルフヘルプグループメンバーから直接体験談を聞く前は、「こわい」、「心の弱い人」という偏見や先入観を持っていた。しかし、「依存のきっかけは身近にあり、私たちと同じ普通の人間だけど、私たちよりずっとつらい体験をされている。自分の居場所を見つけにくい人ではないか」など、印象度と関心度が有意に高まったことから、直接体験を聞くことは対象理解のよい機会と分析できる。

2. セルフヘルプグループメンバーの伝えたいことと学生の共感と関係形成の一致と不一致の混在

結果に出ているように、セルフヘルプグループメンバーの方々が学生に伝えたいことの1番は、「人との関係やつながりの大切さ」や「自分たちの思いを知ってほしい」ということであった。学生の受け止めも同様で、セルフヘルプグループメンバーの思いが伝わっていた。関口³⁾は、アディクションの回復において、自助グループが有効なもの、孤立やうつ状態からの回復の作業を共にやっていく仲間がいるという側面が大きいと述べている。つまり、自分たちの体験の辛さや孤独感を理解してほしい、またセルフヘルプグループにおける人との結びつきや支えあえる存在の大切さを理解してほしいという思いがある。「人との関係やつながりの大切さ」や「生きづらさの大変さ」、「当事者の思い」などの項目は、学生も高い順位を示しており、伝えたい内容と受け止める側である学生の理解が一致していた。このことは、学生が高い共感性をもってセルフヘルプグループの講話を聞くことができたことを表している。これらのことから、セルフヘルプグループメンバーとしての有用性と学生の有用性の一致を意味しているといえる。

有用性とは、内面理解、共感、関係形成と考えることから、セルフヘルプグループメンバーも学生も有用性を獲得したといえる。

一方、学生のなかには、それ以上の学びや思考をした者がいる。学んだこととしてあげた「社会復帰について」や「当事者が看護者や社会に期待すること」、

「治療の大変さ」などの項目は、メンバーが伝えたかったことにはあがっていない。この項目は、学生が、メンバーの方々の話を聴きながら、メンバーの発達特性、病理的状态、常在条件などのメンバーの全体像を看護学生としての目線で援助者と援助されるものという見方を持っていたことが伺える。つまり、援助者になる者として、何をどう援助すればいいのか、援助される者が必要としていることは何か、治療や看護上の問題点は何かなどを知ろうとして講義を受けていた。確かに、看護者になろうとする学修過程の学生にとって大事な視点である。

しかし、セルフヘルプグループのメンバーは、「同じ社会に生きる人間として、同じ立場で自分たちを見て接して欲しい」という生活者としての思いを語っている。これは、セルフヘルプグループメンバーと学生の不一致部分である。関口⁴⁾は、援助者として、自助グループが同じ問題を抱えて苦しんだ人たちが最大の支援者になっていく、そういう当事者の力を信じることを、それを最大限に発揮できるようなサポートをやっていく形が望ましいと言っている。したがって、看護学生が何か援助しなければいけないという思いでメンバーを見るのではなく、まずは、メンバーの生活者としての思いやグループの役割を十分理解し、彼らと同じ位置で、その力が最大限に発揮できるよう見守ることや環境を整えることの大切さを理解できるようサポートしていくことが必要といえる。したがって、まずは関口が言っているように学生もメンバーの意思を汲んで、同じ生活者の目線で傾聴、共感、関係形成をして内面理解をする。そのうえで、援助者としての視点を持って支援を考えていけるように教育していくことが必要であると考える。

学生が学んだことを因子分析した結果、大きく2つの因子に分けられた。分析結果を分類としてカテゴリー名を思慮した結果、『その人の内面を知ること』と『現状を知ること』の2つが生成された。授業前には、アディクションに対し、「誘惑に弱い人」「こわい」などの偏見をもっている学生もいたようだが、これは、やはり依存症というものがどういうものであるか、セルフヘルプグループとは何かなど「知らないこと」による自己解釈が大きいと思われる。今回の授業で、メンバー自身から、依存症に至った背景やその思いなどを、言葉だけでなく、表情や雰囲気、話し方などを通して、その人の思いを知り、それまでの先入観を変えることができたようである。そしてメンバーの方々をより良く知ることで関心が高まり、より正しく、より深く自分の頭できちんと対象を理解し、その人の思いに少しでも近づきたいと思い至

る過程が明らかとなり、メンバーの話を直接聞く体験発表の機会は、対象理解のために重要であると考ええる。しかし、セルフヘルプグループのメンバーは、このような「現状を知ること」ことのみではなく、「人との関係やつながりの大切さ」や「自分たちの思い」を伝えたいという思いが強い。このことは、自分たちをもっとより深く内面の部分を理解して欲しいということであり、『その人の内面を知ること』といえる。学生は、実際に当事者の方から本音を聞くよい機会であった（85.4%）と捉えているが、セルフヘルプグループメンバーは、本音を語れる良い機会だったと書いていたのは29%であり、本心を十分に語れなかった思いが伺える。このことから、メンバーの内面の相互理解にまでは至っていないという不全感を抱いた。木挽⁵⁾は、当事者参加授業において、学生と当事者とのグループワークを行った後の学生達の印象は、「理解しがたい人たち」から「普通の人」へと変化したと述べている。今回の講義後のセルフヘルプグループと教員との反省会においても、次年度はセルフヘルプグループメンバーの発表後、学生

の希望によるグループワークショップの提案がなされた。このように、講義形式で参加者の語りを聞くだけでなく、教員が補足を加えたり、グループワークショップやディスカッションを講義の中に取り入れ、その人自身の内面的な心情にも触れて思いをキャッチボールすることで、お互いの関係形成が促進され、『その人の内面を知ること』さらには、『その人の内面を理解すること』につながると考える。

文 献

- 1) 田辺等：多様化するアディクション問題への治療的アプローチ，精神科看護 35：12-18，2008.
- 2) 武井麻子，末安民生，小宮敬子他：精神看護の基礎精神看護学〔1〕，医学書院：165-167，2009.
- 3) 関口宏：アディクションの背後にあるもの，日本女性心身医学会雑誌 9(3)：209-210，2004.
- 4) 上掲載
- 5) 木挽秀夫：看護学生へ当事者が伝えたいこと，精神看護 13(2)：63-85，2010.

Learning effects of self-help group members from course participation: Consistency in application of content between self-help group members and Nursing students

Ryuko Tokunaga, Noriko Maeda, Misako Hisamatsu

Department of Nursing, Faculty of Nursing and Nutrition,
Kagoshima Immaculate Heart University

Key words : self-help group, nursing student, course participation, learning effects, application

Abstract

Purpose: In the present study, self-help group members with Mental health-related issues such as alcohol dependence who were living in the community participated in a nursing department health education theory course and described their personal experiences. The study was designed to assess knowledge acquired from the course and the learning effects among the students.

Method: A questionnaire was administered to consenting self-help group members and nursing students. Content for which students demonstrated comprehension was compared with points that self-help group members wanted to convey. In addition, a comparison of the students' interest and impression levels before and after the course was examined.

Results: Levels of interest in self-help groups and the strength of impressions left by self-help group members significantly were increased among students after taking the course. The points that group members wanted to convey and the material that students reportedly learned matched for some items, but not all. The items that matched were "the importance of connections and relationships with others" and "the desire for others to know my thoughts." Items that differed included "good opportunity to say what I truly think," "re-entering society," "expectations for nurses and society," and "difficulty in receiving treatment." Factor analysis on the structure of student learning yielded the factors "Knowledge of Current Situations" and "Knowledge of Internal Aspects of Another."

Discussion: The direct experience of listening to the accounts of the self-help group members was a good opportunity for heightening interest levels and eliminating bias among the students. Despite this, there was a lack of consistency in how the members and students applied course experiences. Future course participation should include group work and discussion on the items lacking consistency. Further learning effects may be observed in students by touching upon the emotional states of others and linking inconsistent points to "understanding the internal aspects of others."
